はぐくみ

≪学校教育目標≫ ゆたかな心とたくましい体をもつ子どもの育成

立花北小　校長室だより

令和７年１月１７日発行

No.７「自分の命を自分で守るために」

発行者：校長　佐野　正信

継続は力なり　～自分の命を自分で守るために～

30年前の阪神淡路大震災を子どもたちはもちろん経験していません。それでも、いつかまた必ず起こる地震の時、自分の命をしっかり守ることができるよう、今年も1.17地震避難訓練を行い、３つのお話をしました。

1.17地震避難訓練でのお話

今から30年前の１９９５年（平成７年）１月17日午前５時46分、まだ真っ暗な時間に阪神淡路大震災が発生しました。この震災で６，４３４名という大切な命が失われました。まずはじめに、なくなられた方々に対して、黙祷を捧げたいと思います。静かに目をつむりましょう。

１　「日本という国に住んでいる限り「地震」は必ずやってくる」ということ

私たちの住むこの日本列島は、太古の昔から大きな地震を繰り返しながらできてきました。大きな地震といっても、地球からすると、ちょっだけ寝返りを打つ程度のものなのかもしれません。そこにヒトが住み、家を建てコンクリートで鉄道や高速道路をつくったのは、地球の長い長い歴史からすると、ほんの最近のことなのです。地球が動くとき、人間の力で地面をおさえることができません。起きませんようにと祈ったり心配したりしても、この国では必ず地震は起きるのです。その時、どのように行動するか、一瞬で判断しなければなりません。７年前に起こった大阪北部地震では、通学中、倒れてきたブロック塀で一人の女の子が悲しいことに亡くなりました。何故だかわかりますか。それは、震度４を超える揺れに直面すると人は一瞬身構えてしまうのだそうです。でも、そんな時でも瞬時に判断して建物から離れなければなりません。できますか。学んでいれば必ずできます。毎年このように地震の学習や避難訓練をするのもそのためです。

２　「地震は、いつ、どこで、どのように起きるかわからない」ということ

阪神淡路大震災の発生した午前5時46分はまだ真っ暗で、多くの人たちは家族と一緒にいました。「助けてください！この下におばあちゃんがいるのです」と、近所のみんなで助け出したりしました。でも、もし人々が動き出している時間だったらどうなっていたでしょう。倒れた高速道路や高架の上を車や新幹線、電車が猛スピードで走っていたでしょう。家族は今いったいどこにいるのか、どこで埋まっているのか、そう思うと、もっともっと犠牲者が増えていたでしょう。いつも言うことですが、地震の時、先生やお家の人が近くにいるとは限りません。たとえ自分一人でも、正しい行動がとれるようしっかり学ぶことが大切です。

３　「一番大事なこと、それは、その瞬間を生き延びる」ということ

あるデータを紹介します。亡くなられた方の約80％の死因が圧死・窒息死、つまり建物や家具に押しつぶされたというものでした。また約95％の方が1月17日、つまりその日のうちに亡くなられています。助かったけれど水や食料が来なくて亡くなられた方はほとんどいなかったということです。ですから地震が起こったその瞬間を何としてでも生き延びることが大切です。30年前の地震のあと、学校で顔を合わせ皆で抱き合って無事をよろこび合いました。話を聞くと多くの子が「真っ暗で何が起こったか全然わからなかったけど、お父さんやお母さんが覆いかぶさって守ってくれたよ」と言いました。皆さんからするとおじいちゃんやおばあちゃんですね。もしこのとき当時まだ幼かったお父さんやお母さんが倒れたタンスで亡くなっていたとしたら、今、あなたたちはここにいないということ。「命」とはそういうものなのです。「命」は次へとつないでいくもの。もし途切れたら、そのあとに続く命もなくなるのです。だから、皆さんの命はかけがえのないもの、皆さんにもしものことがあると、ご家族は悲しくて生きる希望を失ってしまうのです。このことは、地震に限ったことではありませんね。自分の命を大切にしてほしいと思います。

【震災時の尼崎市の様子】　※写真：朝日新聞デジタル　web版図解尼崎の歴史　神戸新聞震災アーカイブ等より

崩れた家屋

崩れた新幹線の高架橋

立花町の火災

避難所になった体育館

寒空の青空教室

「継続は力なり」と言います。震災後30年間続けてきた訓練と震災学習は、これからも大切に引き継いでいきます。ご家庭でもこの機会に、いざというときの心構えをぜひ話し合っていただけたらと思います。